

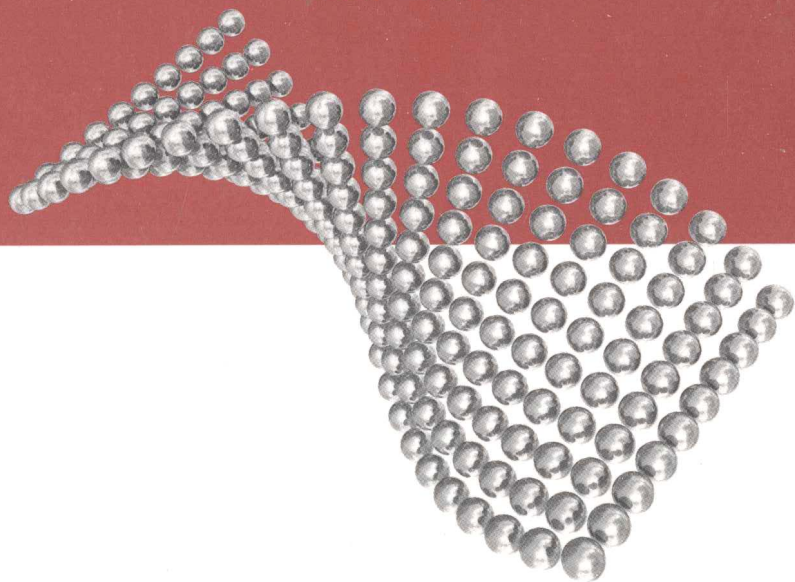
日本語教育学シリーズ

〈第1巻〉

異文化接触論

HIDA Yoshifumi

飛田良文 ▶ 編



おうふう

日本語教育学シリーズ

〈第1巻〉

異文化接触論

HIDA Yoshifumi

飛田良文▶編

【執筆者紹介】

〔執筆者〕

ひだよしふみ
飛田良文

〔所 属〕

国際基督教大学大学院比較文化研究科教授／国立国
語研究所名誉所員

ことうともこ
古藤友子

国際基督教大学教養学部語学科教授

やましたきよこ
山下早代子

東京医科歯科大学留学生センター教授

ぬいべよしおり
縫部義憲

広島大学大学院教育学研究科教授

ただようこ
多田洋子

城西国際大学人文学部国際文化学科講師

たちまきこ
田口雅子

青山学院女子短期大学国文学科講師

W. A. グロータース カトリック神父／国立国語研究所非常勤研究員（執筆当時）

ささきひでき
佐々木英樹

駒沢女子大学人文学部日本文化学科教授

さいとうけいた
斉藤慶太

国際基督教大学教養学部学生

異文化接触論 日本語教育学シリーズ〈第1巻〉

2001年7月20日 初版印刷

2001年7月25日 初版発行 定価は、カバーに表示してあります。

編 者 © 飛 田 良 文

発行者 坂 倉 良 一

印刷所 倉 敷 印 刷 (株)

発行所 (株) お う ふ う

〒101-8340 東京都千代田区猿楽町1-3-1

Tel. 03-3295-8771（営業）

03-3295-8774（編集）

（振替）00140-2-665242

造本には充分注意しておりますが、落丁・乱丁などございましたら、小社かお買い上げ書店にておとりかえいたします。

ISBN4-273-03161-2 C0381

刊行のことば

日本の国際化は日一日と進んでいる。街を歩けば外国人を見かけないことはない。しかし、日本人は外国人といつも仲良く暮らしているとは言い切れない。無数の目に見えない心理的トラブルや誤解が生じている。それは行動形式の違い、考え方のずれによって起こる。話し聞く行動に例をとれば、日本人は話を聞く場合、いつも首を動かし、うなづく動作を入れるが、アメリカ人はじっと相手の目を見て首を動かさない。また、日本人は「ハイ、ハイ」とか「エエ、エエ」とか合の手を入れる。アメリカ人は相手の話し終わるまで、じっと黙って聞いている。そこで日本人は相手が聞いているのかと疑う。日本人の「ハイ、ハイ」は合の手であって意味はないが、これをアメリカ人は英語の yes, yes, と考え、承知した、了解したの意味にとる。yes と言ったのに日本人は約束を守らない、ということになってしまう。こうした単純な動作や合の手から、誤解が生じトラブルへと発展してしまう。

日本語教師が日本語をいくら熱心に教えても、その前提となる外国人の生活・習慣を理解していなければ、言葉は相互理解に役立たない。日本語が上手になればなるほど日本嫌いになる外国人がいるのは、こうした日本文化の教育を受けなかったからである。

さらに指摘しておかなければならないのは、これまでの日本語教育には「学」がなかったということである。その理由を、我々は日本語教育が国語学や言語学、音声学などといった既存の学問体系に安易に寄りかかっていたからであり、独自の視点と自前の方法論を積極的には開拓してこなかったからではないかと考える。

21 世紀を迎え、今や日本語教育はいやが上にも国際的にその成果を厳しい眼差しで見つめられる時期にさしかかっている。そこで、これを機に我々は、日

本人の国際化に大きな障害となっていた異文化接触によって生ずる誤解を解き、さらには全く新たな概念に基づく独自の日本語教育「学」の構築を目指して、ここに野心的な一石を投じることとした。従って、執筆陣にはいわゆる日本語教育の専門家以外の諸氏をも積極的に加えている。

第1・2巻は、異文化の考え方、行動様式の違い、

第3・4・5巻は、音声・意味・文法の面から情報化社会に対応した最新の日本語研究、

第6巻は、教授法の面から、映像を利用する新教授法、
に焦点を置いた。

日本語教師というまでもなく、これから日本語教育学、日本語学、言語学、音声学などを志す人々のために幾分なりとも、従来の同種のシリーズよりは毛色が変わった、刺激的なシリーズとなったのではないかと自負している次第である。

飛 田 良 文 (代表)

平 澤 洋 一

城 生 佑太郎

序

日本人の異文化接触は 1945 年（昭和 20）を境にして大きく変化する。まず外国へ赴任するサラリーマンが増加し、その子どもたちは帰国子女と呼ばれる一団を誕生させた。一方では、日本に留学する外国人学生、日本に働きにくる外国人労働者が急増する。人口の移動にともなう社会生活の変動は、日本人がかつて経験したことのない事態を現実のものとしたのである。日本人が異文化の中で生活する、外国人が外国文化を背負って日本の生活に入ってくる、そこで生ずる誤解は数えきれない。

日本人は外国語を学び、外国人は日本語を学び、お互いに会話ができるようになれば誤解は解けると考えていたが、語学力がつけばつくほど誤解の深刻になる現実がある。これは、コミュニケーションの背後にある行動形式の相違、価値観の相違、宗教観の相違など、生活習慣と思考形態のずれによるものであることをお互いに理解していなかったからである。日本では、「可愛いね」といって子どもの頭を撫でるけれども、タイでは子どもの幸福を追ひ払ってしまうことになる。同じ行為がプラスイメージとマイナスイメージになるのである。言葉の場合も、日本語の「経理」は会計課であるが、中国では日本の社長を意味する。名刺の肩書に注意しなければならない。

今、日本語教育に求められているのは、異文化を背負った外国人に、日本文化（生活習慣・思考形態）を日本語と一緒に教えることである。日本人は残念ながら日本文化を自覚していない。カルチャー・ショックを経験して日本語教師は成長していくのである。

第一巻は、日本語教育を「学」として体系化し、異文化の種類を具体的事例によって紹介した。外国人留学生・日本語教師・バイリンガルの悩みを知り、日本語の語用の測定法や教授法を熟読していただきたいと思う。

目 次

刊行のことば

序

第1章 異文化接触と日本語教育学

飛田良文

1. 国際化時代の異文化接触 9
 - 1.1 国際化と internationalize 1.2 文化と文明 1.3 日本人の国際化意識 1.4 コミュニケーション・ギャップと自己開示
2. 植民地における日本語教育の性格 24
 - 2.1 日本語普及事業の問題点 2.2 植民地の日本語普及事業の性格
 - 2.3 台湾における日本語普及事業 2.4 朝鮮における日本語普及事業
3. 現代の日本語教育の特質 41
 - 3.1 現代の日本語教育の問題点 3.1.1 日本で学ぶ外国人留学生の人数 3.1.2 出身地域別の留学生数 3.1.3 専攻分野別の留学生数
 - 3.2 帰国子女教育の問題点 3.3 第二言語教育としての日本語教育
4. 日本語教育学の体系 52
 - 4.1 日本語教育学の構築 4.2 日本語教育学の現段階 4.3 異文化接触とは何か 4.4 留学生のカルチャーショック 4.5 外国語と外来語の問題 4.6 教育上の問題点 4.7 日本語教育学の領域

第2章 異文化を考える

古藤友子

1. 異文化をみる視点 73
 - 1.1 伝統文化と国家文化 1.2 サブ・カルチャーと支配文化
 - 1.3 個人と文化 1.4 多文化主義と同化主義

2. 文化の構成要素——言語・宗教・価値	83
2.1 カテゴリーとシステムからみた文化の構成要素	2.2 言語からみた文化
2.3 宗教からみた文化	2.3.1 キリスト教
2.3.2 仏教	2.3.3 イスラム
2.4 価値からみた文化	2.4.1 価値システム——どの価値項目に一義的価値をおくか
2.4.2 価値志向と信条体系	
3. 異文化とどうつきあうか	99
3.1 異文化コミュニケーションとは	3.2 異文化理解へのアプローチ——カルチュラル・アウェアネス
3.3 二重文化能力——異文化リテラシー	

第3章 異文化間における語用の測定法

山下早代子

1. 異文化間の語用能力	117
2. 語用能力の測定とは	119
2.1 測定の定義	2.2 発話行為
3. 測定項目	121
4. 測定法	125
4.1 談話完成テスト (Discourse Completion Test=DCT)	
4.2 絵を使った談話抽出テスト (Picture Response Test=PRT)	
4.3 ロールプレイ	4.4 自己評価
5. 日本語教育への応用	134

第4章 異文化コミュニケーションとしての日本語教授法

縫部義憲

1. 日本語教授法と哲学・世界観	137
1.1 日本語教授法の分類	1.2 哲学・世界観と教育観(1):アトミズム
1.3 哲学・世界観(2):プラグマティズム	1.4 哲学・世界観(3):ホーリズム

2. 認知と情意の統合的教育	150
2.1 伝達 2.2 交流 2.3 変容	
3. 認知と情意の統合的指導法	158
3.1 感情技法 3.2 二つの統合的指導法 3.3 認知と情意の統合的指導モデル	
4. 日本語教育の人間化へ向けて	172

第5章 外国人留学生のカルチャーショック

多田洋子

1. 外国人留学生とは	175
2. カルチャーショックとは何か	176
2.1 カルチャーショックの定義 2.2 カルチャーショックの3つのレベル	
3. カルチャーショックの事例	178
3.1 家庭でのカルチャーショック 3.2 学校でのカルチャーショック	
3.3 プライベートな場でのカルチャーショック	
4. 留学して良かったと思えるように	195

第6章 日本語教師のカルチャーショック

田口雅子

1. 日本語教師と学習者との異文化接触	197
1.1 日本語教師が学習者から受けるカルチャーショック 1.2 日本語教師のカルチャーショックとその原因 1.3 異文化を知ることと自文化を知ること 1.4 教室における多文化の世界	
2. カルチャーショックの実例	204
2.1 学習者の反応から受けるカルチャーショック 2.2 学校の方針や制度に対するカルチャーショック	
3. 教室の中のカルチャーショック	209
3.1 クラスルーム・コントロールということ 3.2 授業計画表の意味	

3.3 成績の開示	
4. 「評価」についてのカルチャーショック	214
4.1 学習者からの教師に対する「評価」	4.2 教師に対する「評価」の方法
4.3 カウンセラー制度の役割	
5. 教室の中の異文化衝突	222
5.1 服装・性差別についての考え方	5.2 挨拶の言葉や気配りの表現
6. カルチャーショックの解決案	227
6.1 同僚のクラスの授業参観から学ぶ	6.2 肯定的表現・ほめ言葉の効用
6.3 日本語教師の「自己開示性」	
7. 教師にとってのカルチャーショックの意義	233

第7章 バイリンガリズムの問題点

1. バイリンガルとは	飛田良文	239
2. 第一言語と第二言語——二重言語使用の可能性——		
W. A. グロータース・佐々木英樹 訳		243
2.1 第一言語の習得	2.1.1 子どもの誕生	2.1.2 日本人の誕生
2.2 第二言語の習得	2.2.1 自発学習と学校教育	2.2.2 母語と第二言語の同時習得
2.3 第一言語習得後の第二言語習得		
2.4 日本社会への適応	2.5 外国語は一生の宝物	
3. 帰国子女とバイリンガリズムの実情	斉藤慶太	257
3.1 バイリンガリズムへの問題提起	3.2 バイリンガルになるまで	
3.3 バイリンガルになってから	3.4 帰国後	3.5 バイリンガルのプライドと苦悩

索引	266
----	-----

第1章 異文化接触と日本語教育学

飛 田 良 文

【キーワード】 国際化 伝統文化 価値観 カルチャーショック 第二言語教育 帰国子女

1. 国際化時代の異文化接触

1.1 国際化と internationalize

東京の街を歩けば外国人を見かけないことはない。われわれは外国人の生活・習慣を知り、また外国人には日本人の生活・習慣を知ってもらい仲良く暮らそう、と考えている。「^{インターナショナル}国^際」という概念は、地球上のすべての人々が平等であるための条件である。私は、そう思っていた。ところが、欧米人の学生を相手に授業をすると、考え方、価値観など目に見えない部分で、ショックを受けることがある。同じ意味のはずの翻訳が、同じにならないのである。当面の問題である「国際化」と、それに対応する英語 internationalize とは、その意味する内容が異なっている。長谷川三千子は『「国際化」の根本構造』において、

「国際化」という日本語は実にさまざまに語られ、時によってその指す内容もまちまちであるが、よく見ると、それらすべてに一貫して、ある共通の構造のひそんでいることが解る。すなわち、「外（国際）」に合わせて自らを変えること、という構造である。たとえば企業が海外に進出して「国際化」するのであっても、また、日本社会が海外からの就労者を受け入れて「国際化」するのであっても、この構造だけは変わりがないのである。

（濱口恵俊編著『国際化と情報化』日本放送出版協会，1989，12 ページ）

これに対して、英語 internationalize については、

internationalize という言葉は純粹の他動詞であって、他者を自分たちの所有と管理のもとに置くことを意味する言葉である。少なくとも、自らを他者に合わせて変える、という意味をもつことは決してありえないのである。(同前 13 ページ)

という。その結果、「国際」と自国との位置関係が違ってくる。

日本語の「国際化」は自国が国際の外にいることを示しており、英語の internationalize は自国が国際の内において、かつ他者がその外にいることを示しているのである。(同前 13 ページ)

私は、なるほどと感心したのであるが、これは、日本人が欧米人と接したときなのではないか、アジア人と接したときも同じかどうか、区別が必要なのではないかと考える。

それにしても、欧米人に対しては指摘の通りであって、アメリカ人が世界の警察官だという正義論をふりかざす理由が理解できる。国際基督教大学の教授会は英語と日本語とが使用される。日本語で質問すると英語で、英語で質問すると日本語で答えが返ってくる。このとき、アメリカ人用には日本語を英訳する同時通訳があるが、その逆はない。日本人は英語がよくできるから、といえばそれまでだが、私にはなんとなく不公平だという感じがする。最近、国際の名を冠する大学が増加しているが、はたして「国際」の概念はどうなっているのか心配である。

1.2 文化と文明

日本語教育のカリキュラムを見ると、日本語・日本事情という教科がある。日本事情は文字通りの内容だといえばそれまでであるが、担当者によって異なっているのが現状である。その内容は、法律、経済、政治、風俗、習慣といったものである。これらは、日本文化と一括されることがあるが、それでよいのだろうか。文化は culture、文明は civilization の訳語と区別されて定着してい

るが、これは最近のことである。

文化庁文化部国語課編『異文化理解のための日本語教育 Q&A』（平成6年刊）には、「Q1. 1文化とは何か」の項目があり、文化の定義には、(1)文明学、(2)地域研究、(3)対人相互作用の型の三種があるという。それでよいのだろうか。日本語教育には日本語教育の立場からの定義が必要である。

濱口恵俊は比較文明学の立場から、

「文明」とは、生活システムにおけるソフトウェア面、すなわち「文化」とは位相を異にする制度・組織・装置などを指している。いわば生活システムのハードウェアの側面にかかわるものの総称である。

（濱口恵俊編著『国際化と情報化』日本放送出版協会、1989、193 ページ）と述べている。文化とはソフトウェア面、文明とはハードウェア面と区別された。これは明解な定義である。このような立場に立つと国際化もまた、別の観点から定義できる。濱口恵俊はいう、

従来、「国際化」というのは、ともすれば互いに異質な「文化」の交流のことであると考えられがちであったが、実際には、伝統的文化をそれぞれ背後に背負った「文明」間の交流と、それに伴う「文明」構造の変動にほかならない。（同前 193 ページ）

と。では、伝統的文化の交流はありえるのだろうか。

渡辺和は、

文化とは、ある民族集団固有のものであって、そのメンバーが共有している思考方法の体系である。したがって、他の民族集団への移送は困難である。それぞれの民族集団はそれぞれ文化を持ち、それらの間には優劣はない。

と述べている。文化は思考方法の体系であり、その移送は困難だという指摘は重要である。

この事実を、劇作家平田オリザは明解に例示する。自分の作品をフランスと日本で上演するにあたり、フランス人俳優と日本人俳優の演技を比較して伝統

文化を反映する言語の構造，コミュニケーションの相違が演技に大きな影響力を持つことを指摘している。

まずフランスに行って、60 人ほどの俳優と会い、オーディションを行った。(略)

オーディションでは、テキストとして、私の戯曲『東京ノート』をフランス語に翻訳したものを使った。帰国後すぐに、自分の劇団内でも、『東京ノート』の新配役を決めるためのオーディションを行った。そして、客観的に見ると、私の戯曲を演ずるに当たっては、どうもうちの劇団の俳優の方が数段うまいのだった。

もちろん、一つには、私の戯曲に慣れているということもあるだろう。だが、それより大きいのは、私の戯曲が、日本語のコミュニケーション、日本語のコンテキストを前提として書かれているという点だ。

一般に、日本の演劇界では、欧米の俳優は演技がうまいということになっている。だが、欧米の俳優が演ずるのは、たいていの場合、欧米の言葉で書かれた戯曲のなかの役柄である。その演技を、日本人の俳優が、シェークスピアやチューホフをやるのと比べて、「やっぱり、本場の俳優はうまいや」というのは、どうも不公平な話だ。また、欧米の俳優の演技力を、一つの演技の規範として、それを真似ようとするのは、ナンセンスなことだ。

私は、大学時代、韓国に留学し、その地で韓国語を習得した。私の通っていた語学学校のクラスには、日本人、在日韓国人の他、アメリカ人、フィリピン人、ドイツ人などなど、様々な国籍、様々な人種が入り交じっていた。

私たち日本人は、このクラスでは圧倒的な優等生だった。韓国語の文法と、日本語の文法が酷似しているためだ。最劣等生は、外国語の習得という行為自体に慣れていないアメリカ人だった。私は、「日本人は語学が苦手」という通説が、デタラメだということを痛感した。

今回のオーディションを通じての経験も、これと多少似たところがある。言葉、文法の違いというものは、語学の学習においても、演劇においても、想像以上に大きな影響力を持つ。この構造上の差異を無視して、能力の優劣を語ることは意味がない。

(平田オリザ「連載／二一世紀との対話② 敬語は変わる」『本の窓』1999・9・10号)

さらに、フランスで精神科医を営む太田博昭は、フランスのコミュニケーションの方法が、日本とは全く異なることを指摘する。

日本のコミュニケーションは、言い古された表現を借りれば「以心伝心型」の典型で、フランスのそれは「議論説得型」の典型とも言える。両者のパターンには決定的な違いがあり、これは意識的に訓練しなければ身に付かない。前者では、相互理解の際、感情的融和が重視され、論理的整合性の方はあまり深く追求されないが、後者では逆に、論理的整合性が重視され、感情的融和よりはロジックの切れ味の方に満足感を覚える傾向が強いと言える。「議論説得型」の特徴は、ロジックの重視ばかりではない。レトリックやディベートのテクニクが発達しており、私たちには「意識過剰」とも思えるほど、自己表現や自己主張に固執する。会話は一見すると《ロジックのゲーム》のようで、ルールさえ守っていれば、相手が気を悪くする、しない、に余りこだわらない。逆に、この《ゲーム》に積極的に参加しなければ、「何か下心があるに違いない」と疑われかねない。

「言わずとも、察すべき」コミュニケーションを最上とし、それを身に付けなければ一人前のオトナとは見なされない社会に育った私たちにとって、まるで「ボクシングのジャブの応酬」のようにコトバを戦わせても平気であるフランス的コミュニケーションは、フランス語というコトバ以前の問題である。従って、フランス人と意思の疎通がうまくいかないのは、フランス語が「何とか談笑できる」レベルにある場合は、フランス語力が不足しているためではなく、《ゲームのルール》が身に付いていないためである。ところが、せっかく日本にありながら、日本のフランス語学校では、

この点の考慮が全くなされていない。コトバを教えると同時に、コミュニケーション・パターンも教えなければ、日本的なコミュニケーション・パターンを使ってフランス語を喋るという、奇妙なことになりかねない。

(『パリ症候群』209～210 ページ)

こうした相互理解の方法が、感情的融和を重視する日本人と、論理的整合性を重視するフランス人とは、コミュニケーションの方法を理解しないかぎりなりたない。そこから生ずるパリ留学日本人学生の悲劇は、後を絶たないと太田博昭は警告している。コミュニケーションのパターンは移送の困難な伝統的文化の一つなのである。

語学力とコミュニケーションとは別の次元にあることを知らなければならぬ。

1.3 日本人の国際化意識

1986 年、経済企画庁は日本人の「国際化」に関する意識調査を行った。「あなたは、次のようなことをすることに抵抗を感じますか」という質問である。その項目と回答は次の通りである。〔 〕内は抵抗を感じる人の割合である。

- (ア)職場で外国人の同僚をもつ〔25.2%〕
- (イ)子供を連れて外国に転勤する〔73.8%〕
- (ウ)外国系企業に就職する〔44.9%〕
- (エ)子供が外国系企業に就職する〔33.2%〕
- (オ)外国人留学生を下宿させる〔50.1%〕
- (カ)外国人と結婚する〔66.8%〕
- (キ)子供が外国人と結婚する〔65.6%〕
- (ク)老後を外国で暮らす〔81.5%〕

(経済企画庁国民生活局編『国際化と国民意識』大蔵省印刷局、1987)

抵抗感が強いのは、(イ)(ウ)(キ)(ク)のような、外国人と直接的関係をもったり、外国で暮らすことに關してである。これは、外国人社会に受け入れられ、よい